

## オクラのカルテック施肥例 (10アール当り)

時期	方法	資材
本畑の地力作り	なるべく早めに (定植1ヶ月前迄) 全面に投入して、 深耕します (土壌深くまで肥料分 が行き渡るように) 茎葉残渣は鋤込み	<b>ラクトバチルス 600g</b> … 深く、排水のよい、肥沃な土を作ります。 <b>堆厩肥 1~3トン</b> <b>硫安 60kg</b> (もし複合肥料ならN成分:8~12kg程度) ※もしも堆肥・有機物が無く、砂地の場合は 硫酸カリ10kg追加。 ※このチツソは有機化し、緩効的に効きます。植付け時には土壌EC: <b>0.1~0.2 (0.3未満)に安定していることが大事です。</b> ※もしも土壌pH:5.7以下と酸性の場合は この時にも 畑のカルシウムを 60kg前後 追加して下さい。(土の深層を中和しておく)
ウネ作りの時	ウネ作り時に、ウネ上に均等に散布 (十分に灌水して黒マルチ・フィルムを被覆、7日おく)	<b>畑のカルシウム 60kg</b> ※土壌pH:6.0~6.5が好適です。ただし深層も測定すること。 (栽培中に6.0以下に低下させないように。) pH:6.8以上の場合には カルテック Ca(粒)を。
播種 ~ 1ヵ月	灌水、または本葉2枚目以降は葉面散布でも可	<b>濃縮酵素液 2リットル前後 灌水、または500倍 葉面散布</b> [1]播種後、手灌水に 1000倍で使用…発根・発芽を揃える [2]本葉3枚までに間引き(1穴4本に)。この時に500倍で灌水 ※根を深層へ張らせること。チツソは効かせないこと! ※播種後15~20日で(本葉)第1葉、以後3~5日ごとに1枚展葉。 本葉の3枚目以降、 <b>切れ込みが深く風通しのよい、本来の葉形</b> になります。刻みが浅いのは チツソ過剰か カルシウム不足⇒Ca液を。 刻みが深くて草勢が弱いのは 根の衰弱⇒酵素液を。
開花期	播種後40日頃 第一花の開花期	<b>カルテックCa液状 500倍 葉面散布、または 2リットル灌水</b> ※カルシウムで着果よく、草勢を充実させます。 ※6葉以降、各節に開花する。この第一花の蕾が見えたらカルシウム。 ※以後、花が小さい(直径9cm以下)、黄色が薄い、早朝に一斉開花しない、花卉が萎れる等の場合は カルシウムを補給(及び根の力を)。
追肥	収穫中、半月ごとに	<b>硫安 10kg</b> <b>畑のカルシウム 10kg</b> 基本的には 収穫期間中、半月に1回ずつ、同量・同時に散布。草勢を見て。
調節	収穫中の調節 半月ごと交互に また草勢を見て  サヤの先端までピンと強く、曲がらずに伸びる。 鮮緑色で、種も過熟(黒変)しない  キレイな五角形に張ったガクに、痛いようなトゲが生えている。サヤ全体にウブ毛覆	<b>濃縮酵素液 500倍 葉面散布、または2~5リットル灌水</b> …根を強く働かせ、草勢を維持。展葉・生長が速く、生長点(茎頂)が大きく、茎が太くなる。開花節より上部が伸びなくなったら酵素液を。 また、開花後4日で10cmにならないほど <b>伸びが悪かったら酵素液</b> 。 ※もしも強風で倒伏したら、すぐに引起して 酵素液を灌水。  <b>カルテックCa液状 500倍 葉面散布、または2~5リットル灌水</b> …強い花が 確実に各節に開花。葉は厚く、鮮緑色に。 チツソ過多で曲がり果が多い時にはCa液を。 ※灰色カビ、葉スス、ウドンコなどの対策は、Ca液と通風を。 ※葉カキ(摘葉)はあまりしない。もし過繁茂で広い葉が垂れ、風が通らず日も当たらなくなったら、着莢節の下1~3枚を残して下葉かき ※莢果の太りすぎ、硬化(すじ)、種の苦みは カルシウム不足、カリ過剰の恐れがあります ⇒ Ca液を。 ※カルシウムが効くと、収穫~調理中には粘り少なく、刻むか過熱した後に始めて、濃厚な粘り(ムチン、ペクチン)が溢れます。

「**オクラ**」はアオイ科、東北アフリカ原産。本来は多年生、日本では一年生で栽培。高温性(夜温23℃以上)露地(または初期トンネル)栽培。3～5月播種、5～10月収穫。西南暖地では周年の作型もあります。